

令和4年度 公立鳥取環境大学
学校推薦型選抜（Ⅱ型）問題

小 論 文
(経営学部 90分)

(注意事項)

1. 解答開始の指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は4ページ、解答用紙は2枚です。
3. 解答用紙の所定欄に受験番号、氏名を記入しなさい。
4. 解答用紙は横書きです。
5. 試験終了後、問題冊子と下書用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、問1～3の問題に答えなさい。

実際のところ、少なくとも1980年代初頭までは、鉄道やバスを中心にした交通網のなかで、日々の暮らしに必要なものは最寄りの商店街で一通り揃ううえに、繁華街へ足を伸ばせば、そこには百貨店などの大型店だけではなく、アーケードに覆われた街路に、規模の小さな専門店が軒を連ねて、全体として商店街を形づくっているような景色を見ることができました。

ところが、周知の通り、その後は、乗用車の普及と幹線道路網の整備によって、大型店が続々と郊外のロードサイドに出店し、駅前の商店街をはじめとした中心市街地とは、立地の面で隔絶を深めていきました。

<中略>

加えて、小売革新（出題者注：ここでは、フランチャイズ・チェーンなど新たな業態の出現とする）の進展によって、個人が経営するまちの小売商店と、大企業が組織的に展開する小売店舗との間で、扱う商品の価格や品質にどんどん格差が広がっていきました。市場の細かな変化や地域差といった、従来であれば個人商店が強みとした部分についても、情報技術革新の恩恵によって、大企業が組織的に対応できるようになりました。多くの個人商店からなる商店街という買い物の場は、ますます魅力の乏しいものになっていったのです。

このように、①多くの商店街が、立地の変化を伴う小売革新の進展から取り残された結果、今では、地方都市を中心として、シャッター街と化している例が少なくありません。一方で、そうした現状を憂う声はよく聞かれますし、商店街の賑わいを取り戻そうとする取り組みも盛んです。このまま商店街がさびれていってしまうことには、多くの人がかたがた抵抗を感じており、なにかもやもやした感覚を抱いているように見受けられます。

実際に、私が大学で流通史の講義を行うときに、商店街というテーマで話をすると、授業後の学生からのコメントは、さびれゆく商店街の現状を憂うもので必ず溢れかえります。首都圏の大学では、賑わいのある商店街に接している学生も少なくないのですが、それでも地方出身の学生を中心として、次のようなコメントが数多く集まるのです。

- ・小中学校のときよく使っていた商店街が、最近できたショッピングモールの影響で、コンビニとパチンコ屋以外は活気がなくなって残念だった。
- ・商店街は残ってほしい。あの雰囲気が好きなので。
- ・個人的に商店街は好きなので、盛り上がり直してくれるとうれしい。

このように、商店街がさびれていくことに対しては、多くの学生から「残念」「悲しい」「さみしい」といった声が寄せられますし、商店街を「好き」と言う学生も数多くいます。授業のなかで、私が「商店街はこのままなくなってしまうてもよいのか？」という問いを発すると、「よくない」「いやだ」「さみしい」といった声が多く挙がり、「なくなっても構わない」と答える学生は、ごく少数にとどまります。

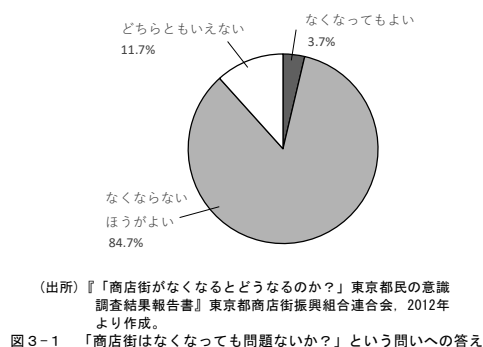
しかしながら、それに続けて私が、「では商店街で買い物をしているか？ 買い物をしたいと思うか？」と問いかけると、学生からは、まず間違いなく「していない」「したいと思わない」という答えが返ってきます。次のようなコメントからも、商店街が買い物の場としては、十分に支持されていない様子がうかがえます。

- ・祭りのときなどは提灯を下げたりと行事に乗っかっていた。近くに神社もあり、人通りは常にそこそこあったイメージ。ただ、物が売れるかは別の話で、正直売れているのは見たことがないというくらいの感じだった。

要するに、消費者としてモノを買う立場から、いわば「消費者の利益」という観点に照らすと、商店街で買い物をするという選択肢は選ばない。けれども、街路の賑わいやコミュニケーションの場、地域コミュニティの担い手という面からは、商店街の存続を強く願っている。これが私の接する学生の最大公約数的な姿ということになりそうです。

<中略>

最初に図3-1をご覧ください。これは、東京都民を対象として2011年10月に行われた、商店街に関する意識調査の結果です。
(<http://www.toshinren.or.jp/resource/research-2012-03.pdf>)。調査は、「商店街がなくなるとどうなるのか？」というテーマで、東京都商店街振興組合連合会がインターネットを使って行ったものです。商店関係者を除く30～79歳の個人のうち、「買い物に商店街をどのくらい使うか」の問いに、「よく使う」「まあ使う」と答えた300名（男性100名、女性200名）が対象となっています。



図にある通り、「商店街はなくなっても問題ないか？」との問いに対して、「なくなってもよい」は3.7%とごく少数に止まり、「なくならないほうがよい」が84.7%と圧倒的多数に上っています。もちろん、②調査対象が商店街を使う人に限定されていますから、年齢の点も含めて、もともと偏りのあるサンプルであることに注意しなければなりません。それを踏まえたうえで、ここで注目したいのは、調査結果の全体から浮かび上がってくる商店街の現状についてです。

調査項目のなかで、「商店街がなくならないほうがよいと思う理由」のフリーアンサーを分類すると、「地域の活気・活性化のため」(18.5%)、「地域の人々の交流・コミュニケーション」(16.5%)、「地元・地域の結びつきのため」(5.9%)という記述が多くなっています。また、「商店街がなくなると困ること」のフリーアンサーについても、「活気がなくなる」(15.0%)、「寂しい」(11.3%)、「人とのつながり、交流がなくなる」(11.0%)といった「情緒的なこと」を指摘する記述が多いという結果を得ています。

一方で、「商店街がなくなっても、スーパーがあるので困ることはないか？」との問いには、「困ることはない」が48.0%と多数派を占めており、「困ることがある」は23.4%に止まっています。調査対象が商店街を使う人に限定され、そのほとんどが「商店街はなくならないほうがよい」と考えているのに、買い物に関してはスーパーがあれば商店街はいらない、という回答が多数派を占めているのです。

こうした商店街に対する意識は、プロローグで紹介した大学生の姿にぴったりと重なります。彼ら・彼女らは、普段から商店街を利用していない若者ですから、この調査の対象からは、ちょうど外れている人たちということになります。賑わいやコミュニティの面からは商店街の存続を強く願いつつも、消費者としてモノを買う立場からは商店街を選ばない、という姿は、多くの人々に広くみられる一般的な態度とあってよいでしょう。

そして、このような態度は、現在の流通政策が直面する課題を物語っています。2000年以降、流通政策の分野では、都市計画との連携のもと、中小小売商を「まちづくり」、すなわちコミュニティ形成の担い手として位置づける形で、商店街の活性化を図ろうとしてきました。

実際に、そうした流通政策のもとで、商店街のさまざまな取り組みが活性化したことは間違いありません。空き店舗を活用したコミュニティ・スペースの設置、地域の歴史・文化資源の掘り起こし、市（いち）や祭りなどのイベントの実施、アートとの連携、ゆるキャラの創作、ポイントカード・地域通貨・スタンプの発行、子育ておよび高齢者の支援、大学との連携、一店逸品運動（各店独自のサービスや商品を提供）やチャレンジ・ショップ（空き店舗を起業者に期間限定で格安に賃貸する創業支援）の展開など、たしかに「まちづくり」の取り組みは広がっています（中小企業庁編『がんばる商店街77選』2006年、『新・がんばる商店街77選』2009年など）。

しかし、そうした「まちづくり」の取り組みが、買い物の場としての商店街の利用に、必ずしもつながっていないのが現状です。先に紹介した調査結果の報告書のなかで、東京都商店街振興組合連合会は、「商店街の地域貢献、社会貢献は商店街の価値としては2次的」なもので、「商店街が生き残り、再燃していくためには、個店の売上UPが必須」であると述べています。そのうえで、「利用者が『商店街に買い物に行く』と意識するように、『購買店としての魅力』、『そこで買うことの良さがあるから行こうという求心力』を築かなければならない」と指摘しています。

出典：満園勇 「商店街はいま必要なのか」講談社現代新書、2015年 一部改変

※学生のコメントの部分は一部を抜粋

問1

下線部① 著者は、「多くの商店街が、立地の変化を伴う小売革新の進展から取り残された」ために、商店街の魅力が乏しくなってしまったと述べている。この、1980年代以降の商店街に立地する個人経営の店舗をとりまく環境変化について、本文を参照し200字以内でまとめなさい。

問2

下線部②「調査対象が商店街を使う人に限定されていますから、年齢の点も含めて、もともと偏りのあるサンプルであることに注意しなければなりません。」とある。この偏りとは、買い物に商店街をどのくらい使うのか、という問いに対して「よく使う」「まあ使う」と答えた人だけを調査対象とし、「ほとんど使わない」「使わない」と答えた人は調査対象にしていないことを指す。このようなサンプルの場合、何に注意しなければならないと考えられるか。150字以内で述べなさい。

問3

地方の商店街の中には店主の高齢化や引退、空き店舗の増加などによって、見た目も中身もかろうじて商店街の体を保っているところもある。こうした商店街が再び買い物の場として利用される将来は描けるだろうか。本文の内容を参考にあなたの考えを500字以内で述べなさい。